

日本語形容詞「やばい」の意味拡張と強調詞化に関する一考察 —認知言語学から観る意味の向上のメカニズム—

阪口 慧

要旨

本稿は日本語形容詞「やばい」の意味・機能の拡張を考察対象とし、形容詞の否定的意味から肯定的意味及びその他の意味・機能への拡張のメカニズムを考察する。日本語形容詞「やばい」は否定的な意味を本来持ち、現在では肯定的意味、否定も肯定も担わない意味（絶対値の意味）及び強調詞として使われる。それらの意味・機能の異なりは、スケールドメインにおける概念化の差異によると考える。「やばい」のそれぞれの意味に対応するスキーマとして、肯定的スキーマ、否定的スキーマ、絶対値スキーマを措定し、それぞれのスキーマ間の拡張関係を認知言語学の観点から考察する。絶対値スキーマと便宜的に名付けたものは「やばい」の否定的スキーマから肯定的スキーマへの拡張、及び形容詞から強調詞（副詞）用法への拡張を可能にする上位スキーマ的節点であると主張する。また絶対値性は「やばい」の意味拡張を説明するためだけに持ち出した概念ではなく、肯定・否定性を持つ語の意味拡張及び機能拡張の分析に有効な概念であることも加えて主張する。

キーワード：やばい、意味拡張、イメージスキーマ、絶対値性、スケール性

1. はじめに

日本語の形容詞「やばい」は本来否定的な意味を持つ語¹であるが、現在の用法では元来の否定的用法、肯定的な用法、肯定・否定性を持たない用法があり、本稿ではそれを絶対値的な用法と措定し、以上の三つの用法を形容詞「やばい」の多義性の基本的な三つの種類であることとする。以下、例を示しつつ、それぞれの種類において、事例に共通してみられる特徴を述べる。下記の例文は現代日本語書き言葉均衡コーパス（以下、BCCWJ²）のコンコーダンス『少納言』で「やばい」を検索文字列にして該当例 627 件の内表示された 500 件からそれぞれの代表例となるものである。例文外括弧には左から順に、検索キーを「やばい」とした時の表示番号、出版年、ジャンルを示してある。

(A) 否定的「やばい」：本来の意味「不都合である。危険である」（広辞苑）

(1) ホワイトデーだよ。しかしネタ何も考えてないよ。やばいやばい。

(No.37, 2008 年, Yahoo! ブログ)

- (2) 2003年4月が賞味期限のミートソースの缶詰ってやばいですか？
(No.163, 2005年, Yahoo!知恵袋)
- (3) 今回のこと、地域の方は結構穏やかに受け止めてたけど、生花組合はちょっとやばいかもしれない。
(No.100, 2002年, 小説)

広辞苑では「やばい」の意味は「不都合である。危険である。」と記述されている。実例として(1)では、状況に対する評価・判断に対して「好ましくない状態。不都合な状態」の意味である。(2)の例では対象に対して「危険である」という意味である。(3)は状況に対して評価・判断を示し「不都合な様である」意味である。(1-3)は共通して、文脈から評価・判断の主体が対象に対して否定的な印象を受けて用いられたものと判断できる。そのため「やばい」の否定的意味の共通点は【評価・判断の主体が対象に対して否定的な印象を示すもの】であると考えられる。

- (B) 肯定的「やばい」:
- (4) ラストの「最愛」(←主題歌)がやばい!!ここまで映画に会ってる主題歌って、ヒッキーの「誰かの願いが叶うころ」以来だ (No.328, 2008年, Yahoo!ブログ)
- (5) あれめちゃうくちゃ好きなんだけどどうすればいい?でも、紅蓮もやばいんだよねーってか金髪も似合わない? (No.272, 2008年, Yahoo!ブログ)
- (6) 森男の兄貴の真介サマは僕と誕生日が同じ!やばい、テンションあがる!
(No.162, 2008年, Yahoo!ブログ)

肯定的な意味は広辞苑には記載されていない新奇な表現である。(4)では映画の主題歌に対して肯定的な評価をしており「良い」に近い意味であることが後文脈からわかる。(5)では、前文脈から比較対象として出てきた名詞に対して肯定的な評価をしていることが分かる。(6)では感嘆を示すものであり、形容詞とはいいがたいが、文脈からして肯定的な評価・判断に基づく感嘆詞であることが分かる。以上より肯定的意味の特徴は【評価・判断の主体が対象に対して肯定的な印象を示すもの】と考えられる。

- (C) 絶対的「やばい」
- (7) まつげの事教えて下さい!かなり焦りを覚えるぐらいまつげの量がやばいんです。
(No.316, 2005年, Yahoo!知恵袋)
- (8) 今年ならではのキーアイテム。お気に入りの一足を選んじゃお 英字新聞柄のぎりぎり感がやばい!
(No.57, 2001年, 雑誌)

上の(7)の「やばい」自体が叙述しているものは量の程度である。量の程度は肯定性も否定性ももたないスケールのため、「やばい」事態は量の「甚だしさ」を示している。(8)「ぎりぎり感がやばい」も他のスケールを持つ語の程度の甚だしさを示すものであ

る。この文が否定的か肯定的かは判断できないが両者に共通して、「やばい」自体が命題全体としての肯定性、否定性を担わず、程度を示す語として使われている特徴が見られる。したがって絶対値的なタイプの特徴は【肯定性及び否定性を「やばい」自体が担わず、程度性の甚だしさのみを示すもの】と考えられる。また、このタイプに類するものとして次の例を示す。

(C) 絶対値的「やばい」(強調詞)

- (9) 数年前、城彰二に弟がいてそいつがやばい上手いっていう噂を聞いたんですが
(No.358, 2005 年, Yahoo!知恵袋)
- (10) みくとひろきからやばいくらいのメールが (No.188, 2008 年, Yahoo!ブログ)
- (11) やばいわぁ浴衣めっちゃ萌えた (No.25, 2008 年, Yahoo!ブログ)

上の (9) は連用形副詞法をとらずに形容詞「上手い」の強調詞として使われている。また (10), (11) では副助詞「くらい」と共起し、副詞として使われている。(10) ではメールの量の程度性を強調、(11) では「萌える」という新奇な表現ではあるが、肯定的な感情を示す動詞であり、「やばい」はその感情の度合いの強調として使われている。以上の分類及び共通点の特徴付けは内省的に行ったものである。

2. 本稿の分析対象及び目的

前節では、BCCWJ から引用した例文を元に、「やばい」の多義的意味を三種類に大別した。ミクロな段階での意味のゆらぎ (例文 (1), (2) では「やばい」はそれぞれ (1) 「不都合である」(2) 「危険である」の意味で使われる) に対する分析は今回の分析対象から除く。認知言語学の観点に基づけば 1 節で示した各例文は事例 (instance) であり、特徴として示したものは意味的なスキーマ (schema) であり両者は事例・スキーマ関係にある。本稿の分析対象はマクロレベル、つまり 1 節で述べた多義的意味の基本的な三種類のそれぞれの特徴、つまりスキーマそれ自体とそのスキーマ間の関係性であり、特に否定的スキーマから肯定的スキーマへの拡張の動機付けは何かを考察することを本稿の目的とし以下の三点を主張する。

- (a) 「やばい」の多義的意味はスケールをドメインとした程度性の概念化の差異から三つのスキーマ (否定的, 肯定的, 絶対値的) の事例だと考えられる。
- (b) 中でも絶対値的スキーマはスキーマ間関係に於ける上位スキーマ的節点として、意味の向上や他の機能 (強調詞) への拡張を動機づけるスキーマである。
- (c) スケールに於ける絶対値性という概念は他の品詞の意味拡張、特に強調詞化の動機付けに対する説明に有効である。

次節以降の構成は以下の通り : 3 節では先行研究として Sano (2005), Voßagen (1999)

の説明を概観しつつ問題点を指摘する。4 節では本稿で採用する理論的枠組を概観しつつ3 種類の基本的意味を生む概念化の差異を記述し、また絶対値性という概念に対する説明を行う。5 節では絶対値性という概念の意味拡張の説明における有用性を示す。6 節にて、本稿の結論を述べ、今後の展望を示す。

3. 先行研究と理論的枠組

本節では、本稿に関連の高い先行研究を二つに分けて概観していく。3.1 節では「やばい」の事例研究として Sano (2005) を概観する。次いで3.2 節では否定的意味から肯定的意味への変化に対して理論的説明を行った Voßagen (1999) のメトニミーに基づく説明を概観したい。

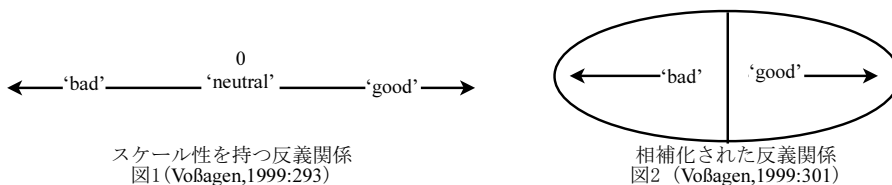
3. 1 Sano (2005) の主張

Sano (2005) では、「やばい」がどのように使われ理解されているかをアンケートの結果を元に記述し、「やばい」は元々の限定的 (definite) な否定的意味が漂白化 (bleaching) した結果、非限定的な (indefinite) 程度形容詞へと変化しているとし、否定的・肯定的意味は文脈により決定されると主張している。また、語形変化を伴わない強調詞としての「やばい」は程度形容詞として他の形容詞の程度性を強調するとし、語形変化を伴わずに副詞として使われるのは、日本語形容詞の活用の単純化の結果であると結論づけている。ただし、程度形容詞への変化の理由に対しては、「やばい」は本来「危険な様子、都合の悪い様、好ましくない様」を叙述するものであり、それらの意味は「事態の甚だしさ」が含まれるため、元々の意味が失われ「事態の甚だしさ」を叙述する意味が残ったとする仮説を立てている。また類似の意味変化をしたものとして「すごい」の意味の変化を挙げている。「すごい」との比較を用いる背景としては、強調詞用法における、誤った活用のされ方に焦点を当てている。現在の日本語において、「すごい」は連用形副詞法を取らずに副詞として使われる事が多い。例えば本来であれば「すごく」とすべきところを「すごい可愛いね」のように終止形のまま「すごい」を扱うことがある。これと似たように「やばい可愛いね」という表現が見られることから、「やばい」の意味の変化を「すごい」と同様のものと結論付けている。

3. 2 Voßagen (1999) の二価志向性と相補化によるメトニミー

Voßagen (1999) は意味の向上に関するメカニズムとして二価志向性 (two-value orientation) に基づく相補化関係により近接性を得たことによるやや特殊ではあるがメトニミーの一つとして、否定的意味から肯定的意味への逆転現象を捉えている。Voßagen (1999) の主張では *good-bad* のように反義関係がグレイディエンスを形成するもの (図 1) が *dead-alive* の関係のように相補的關係 (図 2) に捉え直されやや特殊なメトニミーとして捉え直されるとしている。Voßagen (1999) はこのような現象が起こるのはメトニミーの持つコミュニケーションに於ける機能であると説明している。発話者が「悪くな

いね」と言う時に聞き手は「良い」（やや特殊な解釈）という意味で捉えることが多く見られ、それは上に示した相補的に反義関係を捉え直しメトニミー的に解釈をするためだと主張する。



今回扱う言語現象の中にこの説明と整合する現象がある。本稿ではこの主張を認め、否定的意味から肯定的意味への拡張を促す概念化の一つであると考え。ただし Voßagen (1999) の説明だけでは (7-11) の例文に示したような否定性や肯定性を持たないが程度性を持つ意味・機能への拡張は統一的には説明しきれない。では、Voßagen (1999) の説明の妥当性を認めつつも補足すべき事項として次の三点を提案したい。

- (d) 意味の向上において、スケールドメインにおける概念化において否定的な程度性を持つ語はそこから否定性を捨象し抽象的なスキーマとして純粋な程度性を示す、即ち絶対値的な程度性を抽出し、それがスキーマ的な節点として働き肯定的な程度性への拡張を促す。
- (e) また意味拡張・変化の過程において必ずしも先に言語化されるスキーマではないが、言語化の順序は不明であれ言語化されることもある。
- (f) 相補化という概念化も並行して生じる操作であり、その表れとして拡張した表現にいくつかの制約が生じる事が考えられる。

以下の三点はこれまで概観してきた先行研究を今回の分析対象に応用しうる提案であると考えられる。次節以降、(a-c) の主張及び (d-f) の提案に基づいて「やばい」の三種類の意味の概念化に於ける差異及び、意味の向上に於ける概念化、動機づけに対して与える説明を示していく。

4. 意味の向上におけるスキーマの多様化と絶対値性

本節では再び先行研究の問題点に言及し、また「やばい」の示す事態はスケールドメインのなかでどの様に概念化されるかを示し、それぞれの概念化の差異が「やばい」の意味の3タイプの区別を可能にし、またスキーマのネットワーク構成を可能にしていることを示したい。また本章の最後では具体例を見て、先行研究と本分析を比較する。

4. 1 Sano (2005) の説明の問題点

本節では、前節で概観した Sano (2005) の説明の問題点と、本稿での分析の立場との異同を明らかにしたい。その前に前提として、Ullman (1961) の意味の向上における、

中間項という概念を導入する。意味の向上の特別な例としての中間項とは、本質的に中立的であり文脈や前提しだいで肯定的な意味にも否定的な意味にもなりうるものである。*fortune* (運命) は否定性も肯定性も持たないが *fortunate* (幸運な) という形容詞の場合や、「財産、富」を表す場合に肯定的なものへと変化する。本稿で扱う「やばい」も意味の向上が起きている語であり、また現在意味拡張の段階にあると考えられ、現段階では1節で示したように三種類の用法があるため中間項的である。改めて Sano (2005) の説明をまとめると【否定的>中間項 (程度形容詞)】と捉えられ、「やばい」は意味変化したものととして考えることになる。それに対して、意味拡張の観点から「やばい」の中間項化は程度性の多様化であるとし【否定的> (否定的∧肯定的∧絶対的) = 中間項】と捉えることも可能であると考えられる。つまり前者は意味変化でありスキーマの完全な変容、後者は意味拡張として考えスキーマが多様化したとする見方である。文字だけでは分かりにくいいため、図で示すと (図3) のようになる。

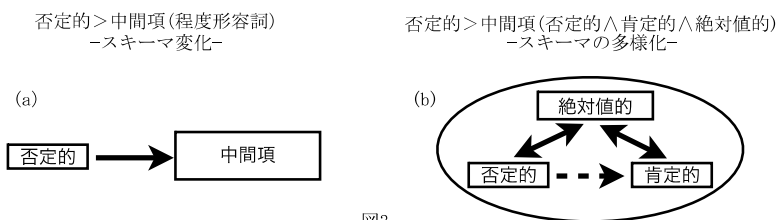


図3

上の (図 3a) は「やばい」の意味のスキーマは一つ、つまり「やばい」の基本的な意味は「程度の甚だしさ」であるとして、「やばい」の全ての意味・機能は文脈的に決定されるという Sano (2005) の説明をまとめたもの。一方、(図 3b) が意味するものは「やばい」の意味のスキーマとして3種類指定したものであり、一つのスキーマから拡張的にスキーマが増えているとする見方である。両者の差異は言語学の用語法における意味変化と意味拡張の区別と対照的である。意味拡張は通時的な意味多様化を、意味変化は通時的、歴史的な意味の変化を指す。Ullman (1962) が挙げている *nice* の意味の向上は意味変化として捉えられる。元々はラテン語の *nescius* 「無知な」という意味が語源であり、それが転じ [無知な>馬鹿な、単純な>恥ずかしがり屋の、つまらない、ささいな>きむずかしい、微妙な、鋭い>感じのよい] (言語学大辞典第六巻『術後編』p61:意味の向上) という意味の変遷を経て、肯定的な意味を獲得した。日本語形容詞「すごい」もその一例であり、元々は否定的な意味を持つ語であったが、現在では Sano (2005) の説明にもある通り、程度表現や強調詞としての用法が定着している。一方、意味拡張とは共時的に生じている意味の多様化であると捉えられる。しかし、「このラーメンはやばい」という表現では、聞き手の世代にも左右されるが、少なくとも若者の間では Sano (2005) の指摘の通り、肯定的な意味にもなり、否定的な意味にもなりうる。この点から、仮に Sano (2005) の主張の通り「やばい」は「すごい」と似た意味変化を辿っていると、まだそれは意味拡張、つまり語が多義的になっていると捉えるべきであるという立場を本稿は取る。したがって、本稿では「やばい」の意味をまだ完全な程度形容詞

として意味変化を起こしたものと捉えるのではなく、否定的、肯定的、絶対的、と三つの意味において多義的な語へ変化した意味拡張をおこしたものであるとし、Sano (2005) の説明をスキーマ変化、スキーマの多様化として捉えることとする。また、Sano (2005) の仮説に基づくと一度漂白したはずの否定的な意味が再び文脈において、否定的な意味を獲得するということになるため言語の変化や拡張の経済性に反すると考えられる。したがって本稿では現在の段階において様々な意味、つまり事例としての「やばい」は三種類の概念化スキーマから具体化されるものとして考え、否定的意味が漂白されるとしてもそれはスキーマが拡張するためにアドホック的に生じるものとして、完全に漂白されるものとは考えない。さらに、NINJAL for BCCWJ を用いて [副詞] + [やばい] というタイプの中の、程度を強めたり弱めたりする副詞として「ちょっと」と「かなり」をとったトークンはそれぞれ 8 例ずつ見つかったが、肯定的な「やばい」と共起する例は見つからず、程度を強めたり弱める語と共起していたのはどちらも否定的な意味の「やばい」のみであった。この肯定・否定の違いによって副詞の共起に制限が出てしまうのは Sano (2005) の説明のように、否定的なものが「甚だしさ」を意味するようになり文脈によって肯定・否定が定まると説明したのでは扱えない意味拡張の結果得られた意味、用法の制約である。したがって本稿では「やばい」の意味は三種類のスキーマを意味の基盤を持つとして議論を進める。またスキーマ変化とスキーマの多様化に関しては 4.5 節で具体例を観察しつつ再び論じる。

4. 2 「やばい」の持つ程度性の差異に基づく三分類

本節では、前節での考察を元に、「やばい」の意味の分類を行なっていくこととする。そのために、本稿では認知言語学における程度性の扱いとして、Clausner and Croft (1999)、形容詞の分類として、Paradis (2001, 2008) を採用する。認知言語学の観点から程度性に言及した Clausner and Croft (1999) はドメインの派生系として、スケール性はイメージスキーマ的ドメイン (image schematic domain) を構成し基本的には位置関係 (locational) 及び配列関係 (configurational) などを概念化するドメインであるが、程度性 (gradability) や量性 (quantity) などの概念もまたスケールドメインの中においてプロファイルされると主張している。また形容詞とスケールドメインに関して、イメージスキーマというドメインは、事物の性質、感覚、判断 (評価) に関する形容詞の段階性が一つの線上における基準点からどれだけ離れているか、という概念化にも貢献するドメインだと規定する。この主張に基づき、評価・判断に関する形容詞である「やばい」も意味的基盤としてスケール性を持つと認める。Paradis (2001, 2008) はスケール性における概念化の差異を形容詞の有界性 (boundedness vs. unboundedness³) の差異であると主張し、段階性を持つ形容詞を三種類に分類している：

- (α) 反義関係が相補関係にありスケール性を伴わない形容詞 (e.g. dead, alive) この類の形容詞には有界性があり、修飾語は有界性のある全体性修飾語 (totality

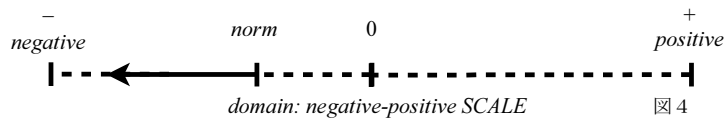
modifier) をとる。(e.g. totality, half, completely)

- (β) 反義関係がグレイディエンスを形成するためスケール性があり、スケールの極端をとらない無界性 (unbounded) があるもの (e.g. narrow, long) 修飾語も無界性のあるものを取り、両性修飾語 (scalar modifiers) をとる。(e.g. very, little)
- (γ) 反義関係がグレイディエンスを形成しスケール性を有するが、スケールの極端をとるため有界性をもつ (e.g. excellent) 修飾語は有界性のある全体性修飾語をとる。(e.g. completely, absolutely)

ただし、有界・無界は完全二項対立的なものではなく、連続的なものであると考えられるとし、有界性を持つ修飾語が有界性を持たない修飾語と共に起する場合もある。(e.g. [bounded]completely [unbounded]good) と述べている。本稿では形容詞の分類においてこの主張を支持し、Sano (2005) の「やばい」は本来的に程度性を持たず限定的な意味であったが現在は程度形容詞となり非限定的な意味であるとする仮説を棄却する。

では、実際に2節において分類した「やばい」の三種類はどのようにスケールドメインにおいて概念化されるのかを本節で分類する。まず、1節で挙げた(A)に類するタイプは否定的な意味で用いられることから、次のようにタイプの特徴を示した:【評価・判断の主体が対象に対して否定的な印象を示すもの】この特徴はスキーマ的なものである。ではそのスキーマを象る程度性の概念化はどのようなものなのかをここでは考えていく。否定的な意味の「やばい」の程度性はスケールドメインにおいて極端を取るか、それとも自由変数的に修飾語(副詞)によって程度性を弱めたり強めたりできるかということに関して(3)「[...] 生花組合はちょっとやばいかもしれないな。」という例でも見られるように、程度性を弱める語と共に起する事が可能であるため、Paradis (2001, 2008) の意味の有界性でいえば無界的(unbounded)である。よって、否定的な意味のスキーマとしての概念化は次の特徴(I)が見られる。また図で示すと以下の(図4)ようになる。

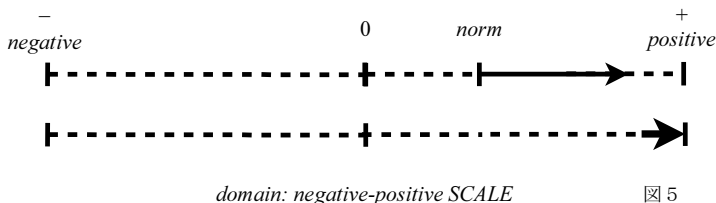
- (I) 否定・肯定スケールをドメインとして、程度性はスケールの否定側の極端を取らず、段階性のあるものとして概念化される



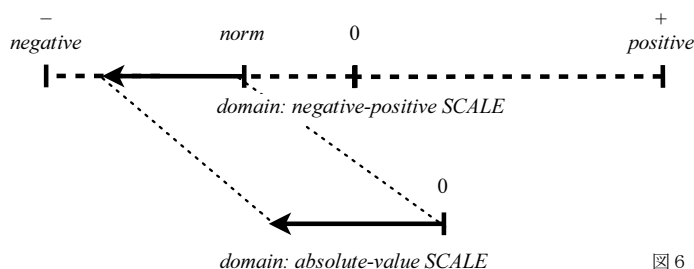
次に1節で挙げた(B)のタイプに類する肯定的な意味をもって使われる場合の程度性の概念化を考えたい。肯定的な意味で使われる「やばい」の有界性は、(図4)とは異なり、文脈にもよるが、程度を弱める副詞と共に起さない場合がある。つまり文脈によっては、Paradis (2001, 2008) の説明による程度性の極端を取る有界的(bounded)な意味としてしか使えない場合があるということである。またこの場合には3.2.3節で見たVoBagen (1999) の程度性が捨象され、相補化したものと類似する。しかし、「やばい」

の意味は現在進行中の拡張・変化の段階にあり、文脈次第で上の様な程度を強めたり弱めたりする語との共起を許す場合があること⁴を踏まえ、肯定的な意味へと意味が向上した「やばい」肯定的意味のスキーマとしての概念化を次のように定義する。図で示すと下の(図5)のようになる。

- (II) 否定・肯定スケールをドメインとし、程度性はスケールの肯定側の極端を取る場合と、極端を取らずに段階性が認められる二つのパターンで概念化される



最後に1節で示した(C)及び(C')に類する絶対値の意味及び機能のスキーマとして、程度性はスケールドメインにおいてどのように概念化されているか考えたい。ここで重要な点は評価・判断の形容詞として用いられる場合も(C')の様に形容詞を前置修飾する強調詞として用いられる場合にも否定性や肯定性は捨象されていることに留意したい。つまり、スケールドメインという一致はあるが、そのスケールドメインの種類が変化していると考えられる。ただし、本稿ではこのタイプに起きた概念化を否定・肯定的のスキーマ節点的な程度性の概念化であると位置づけたい。であれば、肯定性・否定性二つの程度性の概念化から共通する部分は、スケールドメインにおける基準点(*norm*)からベクトルの終点までのスカラー量(*scalar*)つまり否定性・肯定性を前提としない事象の「甚だしさ」に該当する部分である。その場合のスケールドメインは否定性も肯定性も持たないものだと考えるべきである。では本来の「やばい」の意味が否定的な意味であることを考慮し図で示す。



上の図において点線で示されたものは否定・肯定スケールから事象の「甚だしさ」つまり純粹な程度性のみを抽出したということを示している。抽出の段階でスケールが変容しており、ただ単にスカラー量的、あるいは絶対値的な量を持つため、便宜的に絶対値的スケール(*absolute-value scale*)とした。ただし、このままでは、例文(7)の様に量の程度を示す形容詞としては使用できないと考えられる。(図6)で示したものは具体

化 (instantiate) されていない抽象的な概念である。それが例文 (7) や (11) の様に言語化される場合には再びスケールのドメインが変化されなければならない。(7) 「[...]の量がやばい」の様な場合には絶対値的量は量のスケールにおいて概念化されその程度性を示す。この段階では程度性を強めたり弱めたりする副詞と共に起ることが出来る。以上の点を考慮し否定性・肯定性を持たない「やばい」の程度性の概念化を次のように定義する：

- (III) (i) 否定・肯定スケールドメインにおける程度性からその絶対値的なスカラー量をスキーマ的に抽出した概念。(ii) 別の種のスケールドメイン (否定・肯定性ではないもの) において具体化・言語化される場合、極端を取らずに段階性が認められる。(iii) あるいは単体ではスケール性が決定されず絶対値的な量を他の語の程度性を強める。

上の概念化の定義の中で (iii) に該当する部分の説明をここでは補足的に行いたい。例えば「あの少年はとても賢い」という文の「とても」は命題の肯定性を担わず、肯定的スケールドメインにおいて捉えられる「賢さ」の程度性を強調しているわけである。言い換えると、肯定方向への程度性に対し絶対値的に程度性を加えていると考える事ができる。アナロジーとして持ち出すには多少の飛躍があるように感ぜられるが、数学におけるベクトルと類似し、度々認知言語学で持ち出されるスケール性の図示と多少の整合性がある。これを数式的に示すと次の様になる。

- (g) (x and y are natural numbers)

$$|x|+y=x+y > |とても|+賢い = (\text{extraordinariness of } とても) + 賢い \rightleftharpoons とても賢い$$

そして、(C') で示した様に「やばい」は形容詞等、程度性を有する語を前置修飾する形で強調詞として使われている。この場合には (i-iii) で示した様に程度性の「甚だしさ」のみを抽出し、他のスケールにおいて使われている語が示す程度性を強調する。(g) のように (9) の例文で使われる「やばい上手い」を示すと次のようになる。

- (h) (x and y are natural numbers)

$$|-x|+y=x+y > |やばい|+上手い = (\text{extraordinariness of } やばい) + 上手い \rightleftharpoons とても上手い$$

上の数式的な説明で最左辺に於いて $|-x|$ として示したものは上の絶対値的「やばい」の程度性の概念化の定義の (i) にあたる。本来的には程度性は肯定・否定性のスケール上において、否定的な意味を示すものとして使われるものが、命題の肯定・否定性を担わずに単純な程度のスカラー量を他の形容詞の程度性に追加しているということである。

(例文 (9) においては「上手い」に該当) 以上、「やばい」の三つのタイプが意味構造

の基盤であるスケールドメインにおいて、その程度性がどのように概念化されているのかを観察した、ではもう一度ここでそれらがどのようにネットワークを構成しているかを確認したい。

4.3 スキーマに基づく拡張及び相補化メトニミー拡張の統合

前節において「やばい」の基本的な意味をスケールドメインにおける程度性の差異から三つに分類した。上記の三つのタイプと呼ばれるものはスキーマと事例の関係で言えばスキーマに当てはまる。例えば (I) というスキーマが具体化されたものが例文 (1), (2), (3) の中の「やばい」になる。では、改めて、意味のタイプ、つまり基本的な意味を規定する各スキーマはどのように関係しているかを考えていく。まず、意味拡張が起こる前の「やばい」の意味は前節で示した (I) のタイプに当てはまる特徴を持つ。そこから (II) 及び (III) へ拡張していく。その場合、意味拡張・変化の順序を言語事実に基づいて明らかにすることは困難である。しかし、(I-III) で示したものは抽象的な概念(スキーマ)を示すものであるため、必ずしも言語化されているという必要は無い。その上で次のような拡張関係を仮説することは妥当であるように思われる：

(i) 上位スキーマ化に基づく拡張

否定的スキーマからさらにスキーマ抽出 (schematize) を行い上位スキーマとして絶対値スキーマを構築する。(この段階において絶対値スキーマは具体化されているとは限らない。) 上位スキーマの構築を経て肯定的スキーマへと拡張を起こす。絶対値的スキーマは肯定・否定性を持たず「事物の甚だしさ」を形容する形容詞や強調詞へと具体化 (instantiate) される

(j) 相補化メトニミー拡張

否定的スキーマと肯定的スキーマとの関係において、肯定的意味の「やばい」は程度を弱める副詞「ちょっと」と共起しにくいことから、相補化され、有界の意味を持つ概念へのメトニミーも同時に起きていると考えられる

この仮説に基づけば、たとえ先に否定的な意味から肯定的な意味へとメトニミー的拡張するのであれば (j) が先に起こった概念化であることが想定でき、また拡張後の肯定的意味の用法における制限を説明する。また語用論段階で起こる皮肉などに基づく意味の逆転現象も説明し得る。(i) の説明によれば絶対値スキーマを構築しても同時に言語化を求めるものではないため、肯定的な意味が言語事実として先に現れるにせよ、肯定・否定性及び強調詞への意味・機能拡張を説明する。つまり、この説明及びモデル化によれば、少なくとも「やばい」の意味変化に関して縦の時間軸から生じる言語変化の順番に関する問題(何が先に拡張したものなのか)を回避しつつ、意味拡張の動機づけを現在の言語事実と与えることが出来る。

以上の点を全て包含してモデル化して示すが、このモデル化に於いてはLangacker (1987,

2008) の提唱するネットワークモデル、靑山 (2001) の「かたい」の意味をメタファー、メトニミー、シネクドキなどによる意味拡張を統合してモデル化したものを参考にする。ただし、靑山 (2001) ではスキーマ拡張によるメタファー的拡張した意味とメトニミー拡張によって得られた意味は別のものであり、その点は本稿で持ち出す意味拡張を統合的に示すための図とは必ずしも一致しないことをここで断っておく。では以下モデルを示すが、これまで示した (図 2-6) の統合として、概念化の差異に基づくタイプの多様性及び拡張のネットワークを示したものを下記 (図 7) とする。また各スキーマは事例から抽象化 (スキーマ化) されたものであり、事例はその具体化であることもまた示す必要があり、下の図ではそれを (図 8) として示し、スキーマ間関係とスキーマ・事例間関係の二つの関係に分けて図示することとする。実際にはこの二つを統合して図示することも可能だが、ここでは見やすさを重視し以下の様なモデル化に留める。

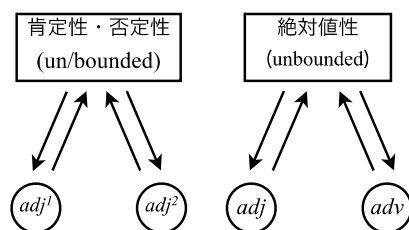
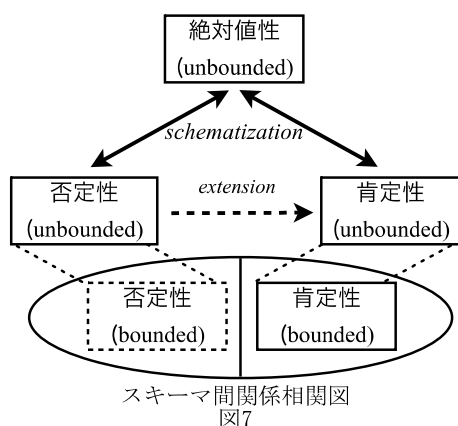


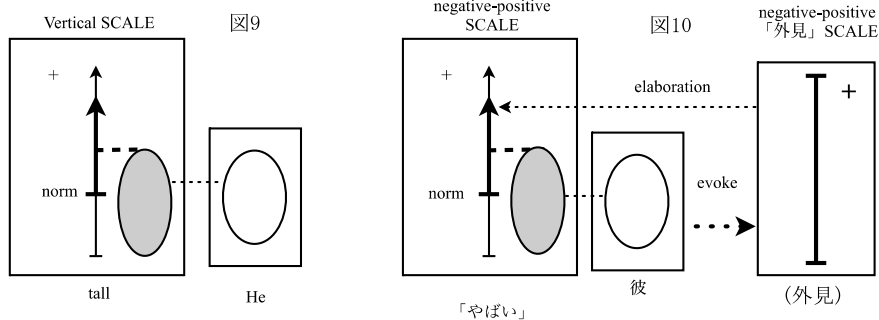
図7の四角で示されたものは意味のスキーマを示し、それ単体では実際の言語表現を示すことはなく、そこから具体化されると考える。図7の各タイプはそれぞれ図4, 5, 6で示したものと同値であるとする。そして図8はスキーマと具体化された言語表現 (事例) との関係を示す。上方向矢印はスキーマ化、下方向矢印は具体化を示す。

上の図左側 (図 7) において、また否定的スキーマ及び肯定的スキーマはそれぞれ (bounded) (unbounded) と二種類の四角で示されているが、それらを点線でつないでいる。これは両者が連続的なものであることを示している。また否定的スキーマの (bounded) なものは破線四角で示されるが、これは (j) の概念化を起こすためのアドホック的なスキーマであることを示している。上の図右側 (図 8) では概念領域から実際の言語表現との関係を示しているが、実際には事例間にもネットワークを認めるべきである。各事例の細かな意味の差は形容詞が被形容辞としてとる名詞句部分の差異 (あるいは名詞によって喚起される背景知識によって、negative-positive 等のスケールがより細かく具体化されること) に基づく意味のゆらぎの差であると考えられる。また今回この図は「やばい」の意味を規定する概念化から生じる意味的スキーマのスキーマ間関係と各スキーマと事例の関係を示したものである。そのため他の言語現象や意味拡張を扱う場合には拡張を示す破線矢印の向きが逆になることも、また各スキーマから具体化する品詞の種類も異なる場合また (図 8) の右側、絶対値的概念領域からの具体化において、形容詞と副詞に具体化することを示しているが、この場合の副詞は純粋に程度性を強めるための強

調詞への具体化であるとする。

4. 4 スキーマからの具体化（スケールの具体化）

前節で、スキーマ間の関係を示したが（図 8）、本節ではスキーマがどのように事例化されるか、つまりマイクロレベルの意味はどのように決定されるかと言う部分に対して簡単に考察したい。例えば否定的な意味の「やばい」も実際には「危ない」や「不都合である」という意味としても肯定的な意味として「良い」、「格好いい」や「美味しい」等と様々な多様性を見せている。これは前節でも述べた通り、形容辞としてとる名詞句部分の差異、そしてあるいは名詞によって喚起される背景知識によって、negative-positive 等のスケールがより細かく具体化されることによる意味の違いだと考えている。ここで、スケールと名詞の関係を認知文法の手法においてモデル化した表現を見てみたい。Langacker（1987, 2008）において示されている形容詞と名詞の関係、*He is tall* という表現において *He* と *tall* の関係は次の（図 9）の用に表す事が出来る。（図 9 のような認知ダイアグラムは Langacker の論文等で繰り返し用いられるものであるため特定の文献からの引用ではないことをここで断っておく。）



英語の形容詞 *tall* はもともとスケールとして物理的実在の高低のスケールを持つということが分かるが、「やばい」等の場合には positive-negative のスケールを持つものとしても、それだけでは「彼はやばい」（肯定的な文脈：作例）などの「やばい」が「彼」の何に対して肯定的な評価をしているか分からない。したがって先に述べたように、「やばい」のマイクロレベルが決定されるには、基本的なスキーマとして立てた、（図 4-6）「やばい」が基本的に持つ negative-positive スケール（図 4-6）が名詞句の喚起する背景知識によって、スケールが改めて具体化されると考える。このことを図示したものが（図 10）である。（図 10）で示したものは、名詞は具体的なスケールを喚起し、「やばい」が本来持つスキーマを具体化し、全ての統合によって、マイクロレベルの意味、（図 10）であれば「彼は格好いい」という意味が出る。この、語が背景知識として何かを喚起するという考え方に関してはフレーム意味論が有効な説明手段だと考えられる。フレーム意味論の応用や、スケール性の決定のされ方に関しては細かく分析する必要はあるが、今回は紙面の制約上本節での言及程度に留める。

4. 5 Sano (2005) と本稿の分析の比較

これまで、理論的な分析を行ったが、本節では具体例を観察しながら、改めて Sano (2005) の分析との比較を行いたい。Sano (2005) は「やばい」を「すごい」と類似する特徴を挙げ、「すごい」の意味変化と同様の過程をたどり「やばい」の意味は否定的形容詞から程度形容詞へ変化すると捉えた。しかし本稿では「やばい」は意味拡張の段階にあると位置づけ、三種類のスキーマを立て、それぞれの程度性の特徴を論じてきた。つまり、「すごい」と「やばい」の意味は似ている部分は認めつつも、まだ同様の変化を経たと位置づけることはできないとする立場である。「すごい」「やばい」の類似点に関しては Sano (2005) の主張を支持し、ここでは両者の差異を考える。Sano (2005) の主張、及び 4.2 節で行った分類に従うと「すごい」は無界の程度形容詞 (β) (III) だと考えられる。したがって、「完璧に」や「完全に」と共起すると不自然な表現となる。しかし、「完全にやばい」「完璧にやばい」などは可能な表現だと思われる。これは、「やばい」の程度性は有界的、無界的な特徴 (β) (γ) (I-III) を持つという証左になると考えている。バリエーションが存在しているためだと考えられる。また、一語文で発話された場合、「すごい」は肯定的な意味へと解釈される傾向が強いと考えられるが、「やばい」にその傾向は無いと考えられる。このことから、「すごい」はより肯定的無界形容詞へと意味変化を遂げたと考えられる。以上、簡単にまとめ、作例を中心に具体例を見たが、「すごい」は Sano (2005) が示すように意味変化を遂げた語、つまりスキーマ (程度性) に変化が生じたもの、「やばい」は意味拡張の段階にあり、スキーマ (程度性) が多様化している段階にあるという結論に帰着する。

5. 絶対値性という概念の生産性及び説明可能性

これまで「やばい」の否定的意味から肯定的意味への拡張現象において、絶対値性という概念、スキーマを仮定したが、スキーマ等の抽象概念を立てる場合、それがただ個別の現象、つまり本稿での「やばい」の意味の向上現象だけを説明するために導入されたものであってはならない。したがって本節では今回立てたモデル及び絶対値性という概念の説明可能性を述べたい。形容詞は他にも絶対値という概念を措定した場合、意味がたとえ向上でなくても意味拡張を捉えられると考えられる。「えらい・偉い」は「えらい暑い」「えらい可愛い」などの様に強調詞として使われる事はあるが、その場合の「えらい」には元々の「優れている、人に尊敬される」という意味は出ない。ただし、「えらい」は語の意味として、品詞を変えると元々程度性の無いものであるが「鬼むかつく」や「一は神だ」などの表現において名詞である「鬼」や「神」は程度性を強調するものかあるいは肯定的な程度性を示す語であり程度性を有していると考えられる。この場合には「鬼」や「神」という語が喚起する背景知識の中に程度性のある概念があるためでは無いかと考えられ (例えば「鬼」であれば「こわい、恐ろしい」という程度性、「神」であれば「神に対する畏怖」というものの程度性などが喚起されると考えられる)、それ

らの背景知識を動員し比喩的な表現が可能だと考えられる。

また構造的図像性との関連も考えられる。「本当に」というものは二値論理的な真偽において、命題などが真であるということを示すものであるが、「本当に可愛い」という時と「本当に本当に可愛い」という場合には後者の方が前者よりもより「可愛い」と言及していると考えられる。他にも日本語に限らずこれまでの説明によって説明し得る表現は多くある。英語の形容詞 *wicked*, *weird*, *ridiculous*, *crazy*, *cool*, *bad* などの意味の向上にも絶対値的な概念をスキーマ節点として肯定的な意味へ拡張すると考えられるのではなからうか。特に *wicked*, *ridiculous(-ly)* などは副詞として強調詞として使われる場合もあることから絶対値的な概念化からの言語表現への具体化は起きていると考えることに幾らかの妥当性はあると考えられる。

6. 結論と残された課題

本稿では「やばい」の否定的意味から、肯定的意味及びその他の意味・機能への拡張に関して認知言語学的観点から観察し以下の主張を行った。これまでの節で述べてきたものを再掲する形で改めてここに挙げる：

- (a) 「やばい」の多義の意味はスケールをドメインとした程度性の概念化の差異から三つのスキーマ（否定的、肯定的、絶対値的）の事例だと考えられる。
- (b) 中でも絶対値的スキーマはスキーマ間関係に於ける上位スキーマ的節点として、意味の向上や他の機能（強調詞）への拡張を動機づけるスキーマである。
- (c) スケールに於ける絶対値性という概念は他の品詞の意味拡張、特に強調詞化の動機付けに対する説明に有効である。
- (d) 意味の向上において、スケールドメインにおける概念化において否定的な程度性を持つ語はそこから否定性を捨象し抽象的なスキーマとして純粋な程度性を示す、即ち絶対値的な程度性を抽出し、それがスキーマ的な節点として働き肯定的な程度性への拡張を促す。
- (e) また意味拡張・変化の過程において必ずしも先に言語化されるスキーマではないが、言語化の順序は不明であれ言語化されることもある。
- (f) 相補化という概念化も並行して生じる操作であり、その表れとして拡張した表現にいくつかの制約が生じる事が考えられる。

ただし、以上の説明では不十分だと考えられること、また「やばい」の意味を扱う上でも本稿で扱いきれなかった点として以下の点を示す：

- (k) 今回提示した絶対値スキーマという概念の抽出が可能なものとならないものとを分別する制約がなければ、過剰般化を許す概念を立ててしまう。
- (l) 「やばい」の意味拡張のマクロレベルの分析を行ったが、ミクロレベルの分析も

本稿で行ったものとは別に改めて細かく分析し直す必要がある。

上の二点は今回の分析に対して考えられる課題であるが、上記の解決案としては、フレーム意味論の分析方法に基づいて評価・判断に関する形容詞が使われる構文、叙述用法として[名詞+が・は+やばい]、限定修飾用法として[やばい+名詞]などを考え、それぞれの形容詞がかかる名詞、つまり被形容辞のタイプから分類することが考えられる。その分類を行えば上記 (l) の課題、ミクロレベルの「やばい」の意味のゆらぎ、例えば本来的な「やばい」の意味である「危険な様」「不都合な様」などの意味からどのようにその他の否定的な意味「(料理) に対してまずい」「(外見に対して) 格好わるい、不細工だ」等の意味へと拡張したのかを分析することが可能であると考えられる。また (k) に関しても本来的にどのようなものを被形容辞としてとる形容詞が、多義性の豊かな、そして機能としても形容詞に限らずに使えるのか、つまり「被形容辞がどのようなものであれば絶対的スキーマの抽出が可能なのか」「被形容辞がどのようなものであれば意味の向上現象を起こしうるか」という部分に答えうるのではないかと考えている。また、5章でも述べた通り、今回立てた概念、絶対的スキーマは名詞などが強意接辞として変化する場合の概念化に対する説明にも答えうると思うが、その変化にも (k) で述べた様に制約が必要であるため、その部分を考察するための理論的枠組としてフレーム意味論は有効だと考えている。

本稿では肯定的意味に拡張した「やばい」の意味拡張を限定した部分から意味拡張を考えた。今後の研究では (k) (l) に示した今回の分析で残された課題を説明する手段としてフレーム意味論の分析を導入し、今回の分析方法を他の評価・判断に関わる形容詞の分析、そして日本語に限らずその他の言語にも応用させ、評価・判断に関わる語の意味拡張の実体及び類型を明らかにさせていきたい。

注

- ¹ 広辞苑(第五版)では「やばい」は名詞「やば」<1. 不都合なこと。けしからぬこと。奇怪なこと。(東海道中膝栗毛)><2.危険な様という隠語(伎,韓人漢文手管始)>の形容詞派生として説明されている。
- ² BCCWJ コーパスは日本国立国語研究所が構築した書き言葉のコーパスであり、書き言葉のジャンルとして雑誌、書籍、白書、議事録、新聞、そしてインターネット上の書き言葉(Yahoo! ブログ、Yahoo!知恵袋、等)から成る。規模としては5000万語になり、日本語のコーパスとしてはかなり大規模である。またこのコーパスを例文として使う意図としては、Yahoo!ブログ、雑誌など、口語的な書き言葉を含むデータを含んでいるためである。そのため若者言葉としての色が強い「やばい」の様々な意味の表れをカバー出来ると考えたためである。
- ³ 本来有界性という概念は行為動詞の始点と終点が明示的かどうかというアスペクトに関するものや、名詞の加算性・不加算性によって、意味の限定性が決定されるとするものである。Paradisはこの概念を形容詞の意味基盤のスケールにおける限定性・非限定性という概念として導入し

ている。認知言語学では Talmy (1988)、池上 (1999-2001)、が述べるように有界性ないし無界性という概念は単に素性を示す二項対立的なものではなく、イメージスキーマ的あるいはメタスキーマ的なものと捉える場合があり、Paradis の主張はこれに整合する。

- 4 日本語検索サイト (JReK) を用いて「ちょっとやばい」「かなりやばい」の二つを調べた所、否定的なものと共に起る場合が多いが、「ちょっとやばいよ、これ! (笑)」「(アイドルグループを肯定的に評価)「かなりやばい焼きそばと揚イモフライ」(料理を肯定的に評価) など、肯定的な「やばい」と現れている例も見受けられた。この二つの例は2012年6月30日に検索した段階で表示された例文である。日本語検索サイト (JReK) は日本語で書かれた web ページを巨大なコーパスとして扱いそれを検索可能な形で提供する web コーパスである。ただし、表示件数には限りがあること、また表示される例文は必ず同じではなく、常に更新されるのはこのコーパスを使う上での注意点である。

参考文献

- Clausner, T. & Croft, W. (1999) "Domains and image schemas" *Cognitive linguistics* 10-1, 1-31.
Fillmore, C. J. (1982) "Frame Semantics" in *The Cognitive Linguistics Reader*: 238-262
Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 1*: Stanford university Press, Stanford.
Langacker, R. W. (2008) *Cognitive Grammar -A Basic Introduction-*: Oxford University Press, New York.
Paradis, C. (2001) "Adjectives and boundedness" *Cognitive linguistics* 12-1, 47-65
Paradis, C. (2008) "Configurations, construals and change: expressions of DEGREE" *English Language and Linguistics* 12-2, 317-343
Sano, S. (2005) "On the Positive Meaning of the Adjective Yabai in Japanese" *SOPHIA LINGUISTICA*: 53, 109-130
Ullman, S. (1962) *Semantics: An introduction to the Science of Meaning*: Blackwell, Oxford (池上嘉彦訳 (1967) 『言語と意味』 大修館書店, 東京)
Voßhagen, C. (1999) "Opposition as a Metonymic Principle" in *Metonymy in Language and Thought*: 289-308
初山 洋介 (2001) 「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喻」, 『認知言語学論考』 1: 29-58

[辞書及びコーパス]

- 岩波書店 (2002) 『広辞苑:第五版』
三省堂 (1996) 『言語学大辞典:第六巻「術語編」』
日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)
検索サイト (NINJAL for BCCWJ) :<http://ninjal-lwp-bccwj.ninjal.ac.jp/>
コンコーダンサ (少納言) :<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>
日本語例文検索 (JReK) :<http://jrek.ta2o.net/>

